

【特集】歴史資料からみた二宮町の地震・津波被害 ～『新編 一宮町史』編さん事業の活動から～

今年2023年は、関東大震災（大正12年・1923）から

100年、元禄地震・津波（元禄16年・1703）から320年の年となります。関東各地の博物館などで、関東大震災に関する企画展が開催されました。

海に面した一宮町は度々津波被害に見舞われました。本年6月には専門家の方をお招きし、九十九里地域の地震・津波被害について、講座を開催しました。

今回の特集では令和4年度から実施している『新編 一宮町史』編さん事業の調査活動の中で、新たに確認された地震被害関係史料などから、町の地震・津波被害を紹介します。

（文責：学芸員 江澤一樹）



▲『万覚書写』の写し

一、外房地域を襲った地震・津波

江戸時代以降、千葉県は多くの地震・津波被害に襲われています。近年では平成23年（2011）3月11日の東日本大震災が記憶に新しいでしょう。今回のコラムでは、延宝5年（1677）の延宝地震・津波、元禄16年（1703）の元禄地震・津波での被害状況を、古文書などの歴史資料から見ていきます。なお、この二つの地震の概要は左記のとおりです。

●延宝地震・津波

【発生日】

・延宝5年10月9日

（1677年11月4日）

【推定規模】M8

●元禄地震・津波

【発生日】

・元禄16年11月23日

（1703年12月31日）

【推定規模】M7.9 ～ 8.2

二、東浪見村の被害

現在の大字東浪見地域の被害状況は主に二つの歴史資料から、その様子をつかいたい知ることができます。

①『万覚書写』

この史料は東浪見村の兒安惣次左衛門とその子孫が記した冊子で、延宝5年（1677）から享保4年（1719）までの様々な記録が記されています。その記録の多くを占めるのが地震・津波被害です。

延宝地震・津波については52軒が津波で押し流され、男子ども137人が亡くなり、その後約1か月の間でさらに14、5人が打ち身などで亡くなり、計150人余りの人的被害があったと記されています。さらに地曳網の網や諸道具もすべて流され、押し寄せた砂を除去するのに3、4年かかったとあります。

元禄地震・津波については、延宝地震より津波が約1.2メートル余り高かったこと、下通り（海岸近くの通り？）の家は押し流された、とあります。ただ延宝地震の被害を覚えていた

ので多くの人は逃げて、死者は14、5人だった、とも記されています。過去の地震の教訓が活かされていたことがわかります。

②延宝の津波供養塔（町指定史跡）

延宝津波による被害者の供養塔で、元禄7年（1694）に建立されました。石碑には東浪見村の新熊・原・入鉢で143人（男70人、女73人）が亡くなったと記されています。『万覚書写』と人数が重複しているとみられ、延宝津波での東浪見村の被害者は約150人だったと考えられます。九十九里沿岸では元禄津波の供養塔は多くありますが、延宝津波に関する石造物は珍しく、現在確認できているものはこの供養塔のみとなります。



三、一宮本郷村の被害

現在の大字一宮地域の大部分にあたる一宮本郷村。延宝から元禄の頃は、幕府の代官が支配していました。近年調査を進めていく中で、「村鑑」という史料に津波に関する記述があります。

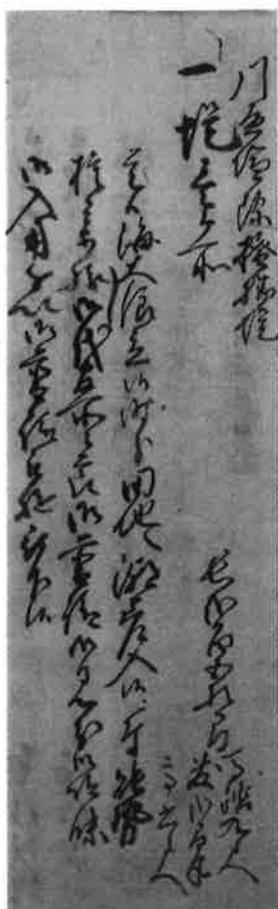
「村鑑」とは、江戸時代に各村毎に家数・人数などの村の概況を記したものです。町では現在、名称はそれぞれ異なりますが、左記の年代の3冊を所蔵しています。

- (1) 元禄16年(1703)7月
- (2) 享保6年(1721)2月
- (3) 延享4年(1747)7月

《延享4年「一宮村鑑下書」抜粋》

川通塩除探場堤
 一 堤巻ヶ所 長式百五拾間 馬踏九尺
 敷式間半 高六尺

是八海大浪立候時分田地へ潮差入候二付野勢
 権兵衛様御代官所之節、御普請御見分御吟味
 御入用を以御普請被下候



(1) は元禄津波の4か月前の村況が記されています。残念ながら延宝津波に関する記述はありませんが、田畑の石高には「津浪永引」とあります。これは津波の影響により年貢を一部免除することを意味し、これ以前に津波被害があったことを物語っています。

(2) は元禄津波から18年後の村鑑です。この史料の田畑の記述には「未津波砂押引」(津波で押し寄せた砂が未だ引かない)という文言が多く見られます。

また「当村田畑共元禄十六年津波入亡所ニ罷成候、其以後年々少々宛切開候得共濱砂二而水持無御座、年々早損

場二御座候」(一宮本郷村の田畑は元禄16年の津波で亡所(耕作者がいなくなる)になってしまった。以後毎年少しずつ切り開いてきたが浜砂のため、水持ちが悪く、年々干害が発生する場所となつてしまった。)ともあります。津波から20年近くが経過してもなお、押し流されてきた砂の除去に悩まされていたことがわかります。

(3) の史料には興味深い記述があります。本ページの左上に抜粋の写真に掲載しました。

ここに登場する野勢権兵衛は元禄津波の頃の一宮本郷村の代官であり、この「海大浪立」は元禄津波のことだと推測できます。田畑への津波の流入を防ぐため、堤が築かれたことが記されています。

具体的な場所は不明(「川通」とあるので一宮川沿い?)ですが、長さ二百五十間(約272m)におよぶ堤

馬踏九尺(約2.727m)



二間半(約4.5m)

▲元禄津波後に築かれた堤の模式図

高さ六尺(約1.818m)

が津波対策として築かれたということがこの史料からわかります。これまであまり知られていなかった事実が調査によって明らかになりました。

なお、延宝・元禄津波での一宮本郷村での人的被害はわかっています。今後の調査で新たな史料が発見されることが期待されます。

近年多発する自然災害。過去の歴史を紐解き、後世に伝えていくことは非常に重要なことです。

今後も町では歴史資料の調査研究を進めていきますので、古い資料の情報などありましたら、ぜひご連絡ください。

※「村鑑」の翻刻作業には町史編さん委員の龍澤潤氏に尽力いただきました。

《参考文献》

- ・令和5年度第1回一宮町文化財講座「江戸時代の九十九里地域の地震・津波被害」(古山豊氏)レジュメ

冒頭で紹介した『万覚書写』の原本の所在が現在わかっています。何か情報をお持ちの方は教育委員会まで一報ください。

【問合せ】教育課 ☎(42)1416